

巻頭言（2013年10月号）

理事長 新谷友良

「猛暑と3冊の本」

35℃を超える猛暑日が当たり前になった東京の夏。避暑に行くこともなくお盆の一週間、読もうと思って読んでいなかった大岡昇平の「野火」と「俘虜記」、阿川弘之の「春の城」を読んで過ごしました。広島、長崎や8月15日を少しは意識したのかもしれませんが、とにかく暑いので開き直って少し硬めの活字を追ってみようと自棄な気分でした。

何年か前に大岡昇平の「レイテ戦記」を、記述のあまりの克明さに圧倒されて、何度も何度も中断しながら読んだ記憶があります。半年ぐらいかかった読後感は「とにかく最後まで読んだ」というものでしたが、時間が経つうちに、それは「レイテ戦記を最後まで読んだ」という分厚い記憶として反復されてきました。戦記文学最高傑作の一つを「分厚い」と形容するのが適切かどうかわかりませんが、天候や草木、船や飛行機の詳細な描写を、感情を交えずに何枚も何枚も積み重ねていく文章は、「分厚い」と形容してもおかしくないと思いました。

そんなことへの懐かしさもあって、今回先ず同じ作者の「野火」を読んだのですが、これが生やさしい作品ではなく、自分の日常生活とあまりにもかけ離れた、人肉を食べる話や帰国後の主人公の狂気に後ずさりしてしまいました。それで大岡昇平はもうやめと思ったのですが、「俘虜記」も一緒に買ってあったので仕方なくこれにチャレンジ。これがまた、捕虜になった主人公と捕虜仲間、米軍の人間との心のやり取りを、これでもかこれでもかと書き連ねられていて、読後感やはり「レイテ戦記」と同じく「とにかく最後まで読んだ」というものです。天候や船舶同様、心の動きを事実として積み重ねていけば、「俘虜記」のような描写になるのかもしれませんが。

猛暑下の読書3冊目は阿川弘之の「春の城」でした。戦記文学より青春文学として評価の高い作品ですが、戦時下の生活にも平穏な時代と同様に非常に様々な姿があったことを改めて知ります。そして終章の原爆を受けた広島の市内の情景に、戦争と日常生活の断層が鮮明でした。

東京の酷暑の不愉快さから、フィリッピンの中山の過酷な敗走を想像することは、不可能というより不謹慎ですが、今年の酷暑は戦争を知らない世代のひとりに、3冊の本で「戦争」ということを考えさせました。